奥の院燈籠堂前にて

霊宝館だより

霊宝館だより 第87号
平成20年6月30日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
(財)高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736―56―2029
URL http://www.reihokan.or.jp

第29回大宝蔵展「高野山の名宝」

2008年7月19日（土）～9月15日（月）

現在企画展開催中「童子とほとけ」

2008年7月6日（日）まで

現在企画展開催中

「童子とほとけ」

平成20年7月6日（日）まで

わが国では、中世の頃より童子には聖俗を介する存在として聖なる力があると考えられるようになり、童子形の神仏や聖人の子供時代の姿に対する信仰が盛んになりました。高野山を開創された弘法大師空海は、誕生時や子供時代の様々なエピソードが絵巻などにまとめられ、伝えられるとともに幼少時の姿を描く稚児大師像も信仰を集めています。

また、本尊の脇侍として童子が配されることも多く、国宝八大童子立像は不動明王の従者である八人の童子を写実的に表現した、高野山を代表する、あるいは鎌倉時代を代表する彫刻群として広く世に知られます。

今回の企画展では「童子とほとけ」と題し、童子形のほとけ、従者としての童子、子供を守護するほとけなど、高野山に伝わる什宝の中から「童子」にスポットを当てて国宝二件、重要文化財十一件を含む計二十四件二十六点を展示致します。

時にいかめしく、時に愛らしい童子たちの姿を通じて、仏教美術および密教美術に親しんでいただければ幸いです。

国宝　指徳童子像　金剛峯寺

国宝　恵光童子像　金剛峯寺

第29回大宝蔵展

「高野山の名宝」

期間　7月19日（土）～9月15日（月）

孔雀明王像

主な出陳品

国宝

八大童子立像、仏涅槃図、聾瞽指帰、沢千鳥螺鈿蒔絵小唐櫃（以上金剛峯寺）勤操僧正像（普門院）

重要文化財

孔雀明王像、大日如来像（西塔旧在）、即身成仏品、増壱阿含経巻第三十二（以上金剛峯寺）、覚禅鈔（西南院）、孔雀文磬（蓮花院）、阿弥陀浄土曼荼羅図、高野版木製活字（以上西禅院）、釈迦如来及び諸尊像（普門院）、毘沙門天像（光台院）、漢書（大明王院）などを展示

国宝13点　重要文化財36点、和歌山県指定3点、重要美術品1点、合計80点を展示。

収蔵品の紹介 61

重要文化財

十巻抄（じゅっかんしょう）

鎌倉時代　円通寺

十巻で構成されているため十巻抄といい、密教修法の本尊の姿を集めた図像集である。

各巻とも数尊から十数尊の図像が記述され、全巻で計一四二図を集輯したもので、諸尊の図像を知る上での辞書のようなものである。

本書は書写で、第一巻の奥書に「延慶二年五月十八日於桂宮院書写了　金剛仏子印玄生年三十三」とあることから仁和寺の学僧　印玄（一二七八～一三四六）が延慶二年五月から三年六月（一三〇九～一三一〇）にかけて一カ年をかけて書写されたことがわかる。原本は鳥羽上皇の命により撰され、作者は御室保寿院の祖である永厳（ようごん）またはその弟子恵什（えじゅう）とも伝えられるが現存はしない。

十巻抄 巻十　天等下の中から
訶梨帝母（かりていも）・鬼子母神（きしぼじん）

訶梨帝母は「法華経」のなかに説かれるほとけで、サンスクリット語（古代インドの言語）で名前をハーリティー（Hariti）といい、これを訳して鬼子母神と呼ばれる。

鬼子母神は般闍迦（Pancika　パーンチカ）という神の妻であるとても美しい女神で、五〇〇人（一説には千人または一万人）ものたくさんの子どもがいたという。鬼子母神の性質は凶暴この上なく、自分の子供を育てるため人間の幼児をさらって食べ、人々から恐れ憎まれていた。人間たちは子供たちをさらわれることを恐れ苦しみ、お釈迦さまに相談した。

お釈迦さまは一計を案じ、鬼子母神がもっとも可愛がっていた末子・愛好を隠してしまう。鬼子母神は嘆きそして悲しみ、世界中を探し回ったが見つかるはずもなく、途方に暮れ、ついにお釈迦さまに、自分の子供が居なくなり見つからないことを話し助けを求めた。

お釈迦さまは鬼子母神に「五〇〇人の子供の内、たった一人居なくなっただけで、嘆き悲しみ私に助けを求めている。たった数人しかいない子供をさらわれた人間の親の悲しみはどれほどであっただろう」と話し、「命の大切さと、子供が可愛いことには人間と鬼神の間にも変わりはない」と教えられ、子供を鬼子母神の元に返された。

鬼子母神ははじめて今までの過ちを悟り、お釈迦さまに帰依し、その後安産・子育ての神となることを誓い、人々に尊崇されるようになったとされる。

鬼子母神は天女のような姿をし、子供を一人（末子の愛好とされる）抱き、右手には吉祥果を持っている。吉祥果とは柘榴（ザクロ）ことで、ザクロの実をみると一つの実の中にまたたくさんの小さな実があり、その一つひとつがそれぞれに小さな種を持っている。このザクロの実を手に持つのは子供を守る神として子孫繁栄の願いが込められているのである。

（S）

連載

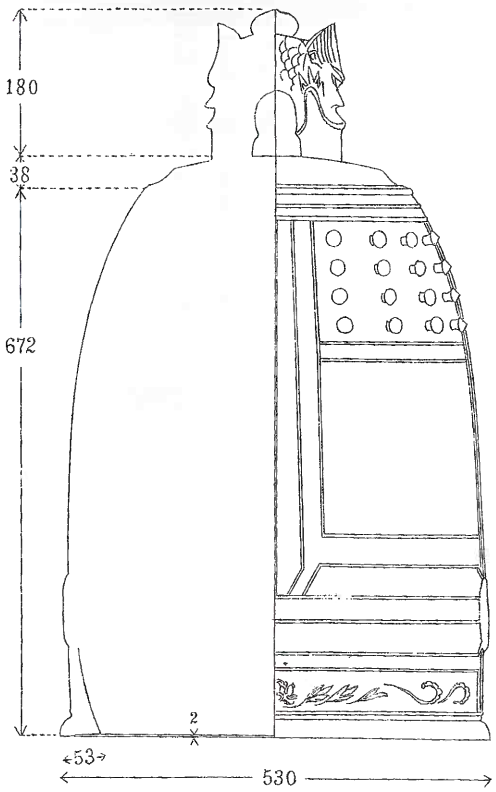
高野山の名鐘

其の9 円通律寺

霊宝館副館長 井筒 信隆

円通寺伝来「元淨真院梵鐘」

寺宝の移動を知る梵鐘

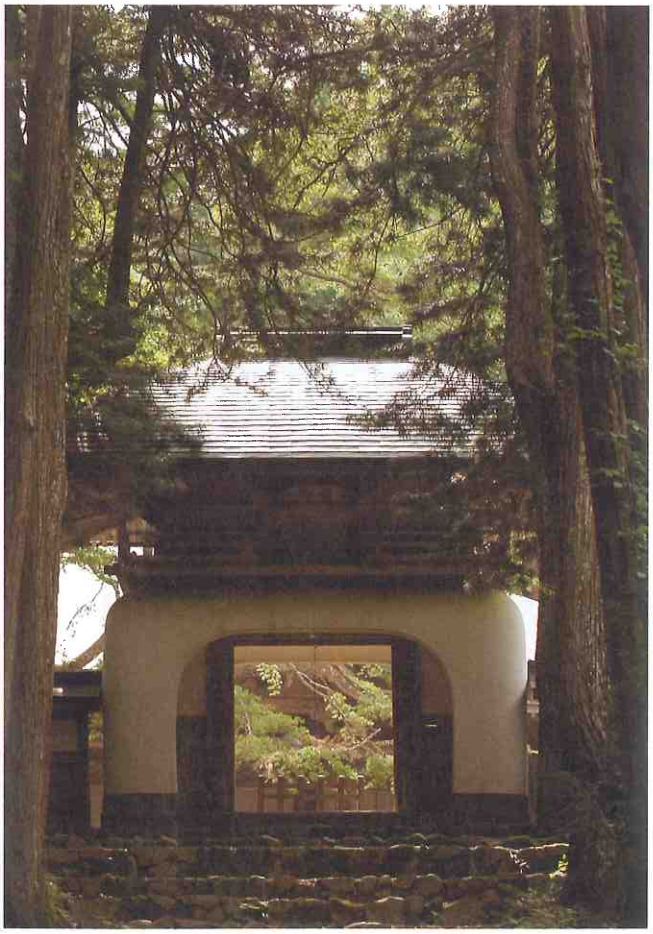


高野山の一の橋の近くの恵光院と熊谷寺の間の道を南に入り弥勒峠と称される低い峠を越えた谷底の清閑な谷間に円通寺が存在する。円通寺には本堂、庫裏、鎮守社などの建物が存在するが、本堂には平安時代の十世紀末に制作されたと考えられている桜材による一木造のボリュームのある重文「釈迦如来坐像」が本尊として安置されている。

円通寺の建つ場所は、平安時代末期の平家軍の南都攻めで焼失した東大寺の再建大勧進職をつとめた俊乗房重源上人が、念仏別所の新別所専修往生院を設けていた由

緒あるところである。円通寺は、その重源上人を慕った山口修理亮入道重政と玄俊律師によって元和五年（一六一九）四月に再興されたものである。以降戒律堅固な往僧に受け継がれ今日に至っている。現在、円通寺には「事相講伝所」が開設され修業道場の機能を有している。

水のせせらぎの聞こえる清閑な円通寺の入口にある楼門上に、今回紹介する梵鐘が存在する。坪井良平氏著『高野山の梵鐘』によると、梵鐘が製作されたのは当初の安永七年（一七七八）三月在銘の原銘と明治三年（一八七〇）五月の追刻銘が存在すると報告されている。



安永七年の当初の在銘によると、江戸時代の高野山絵図などに描かれ存在が確認される小田原谷にあった聖方の淨真院の前住職澄依の心願によって、弟子の玉蔵院澄雅が梵鐘の鋳造のために勧進して、同院の賞穆の代に製作されたがことを伝える銘が池間第一区に存在する。その鋳造勧進に応えた人々の寄進者の芳名の銘が第三区に存在することを報告している。

また、第二区の池間には、円通寺榮厳師が記した明治三年の銘が存在するが、時代の変転の中でこの梵鐘が円通寺に伝わることになった旨を記すが、淨真院が明治時代の寺院が統廃合などの理由で廃寺となったことから円通寺に移されたという具体的な理由を伝えている銘文ではない。しかし、激動の時代を迎えた明治初年の高野山時代をほのかに意識させる銘文である。高野山における寺院統廃合や寺宝の移動を知ることのできる梵鐘でもある。

高野山の文化

(一) 巡寺八幡について　その五

前奥之院維那　日野西　眞定

(一) 酒殿神社への合祀について

(1) 兄井・酒殿神社の鎌八幡社

この(2)項で、一応述べたが、今回何度か調査に行ってみると、見落としていたり、誤解していたこともあるので、追加・訂正をしておく。

①兄井地区の現状

現在のかつらぎ町兄井の「鎌八幡宮」「諏訪明神社」の二社の前方に、「幡掛松跡」の石碑が、一九九三年(平成五年)三月吉日に、兄井区の人達によって建立されているのが見付かった。文面によると、『紀伊国名所図会』(三編巻ノ三)の「旗掛松」の記述を引用している。「兄井村道傍にあり、高野巡寺熊手八幡、紀ノ川を遡り、高野へ飛行し給ふ時、御旗しばらく此ノ松に掛らせ給ふが故に、なづくとなん」とあり、つづいて、「ところが、第二次世界大戦末期、この霊松は、木造船の用材として微発され、里人の惜しむ声も空しく伐採されて、今日に至った。ここに、往時の霊松をしのんで、碑

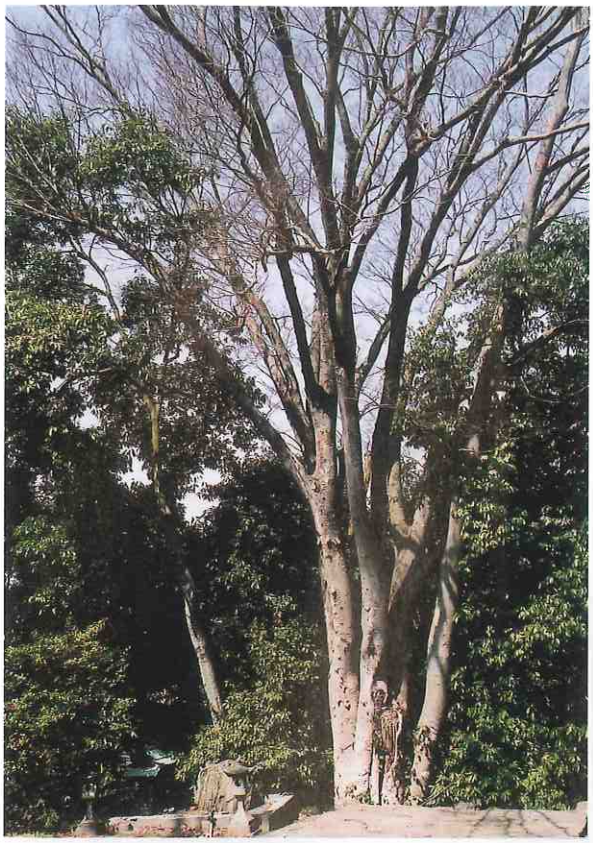
「幡掛松跡」の石碑

幡掛松跡（手前の石がある所）

を建立する。」とある。

これによると、幡掛松と鎌を打ち込む神木とは別の存在であることが明らかである。そして、その後は断えているのである。（2）で紹介した『紀伊続風土記』（五・総・八十三頁）には、「浦島」とあるのは、ここではないかと思われる。しかし、『続風土記』の記述には、鎌八幡との混同があるようである。

次に、この「幡掛松」の発生地であるが、『続風土記』によると、もと現かつらぎ町三谷地区にある「涼の森」にあったが洪水の時に流れて、兄井地区に来たとある。これも調査すると、見付けることが出来た。九度山町とかつらぎ町の境にある。その背後に紀ノ河が流れている。そこに欅の古木の神木が植えており、その元に石造の祭壇跡が残っている。


涼の森の御神木（けやき）

祭壇に祀られる小社と御神石

そこに現在でも、小社と自然石が祀られている。小社の中には、「鈴森大明神」と墨書された御幣が納められ、その信仰は今でも生きていることが知られる。その傍らの自然石は、古い御神体であったかも知れない。

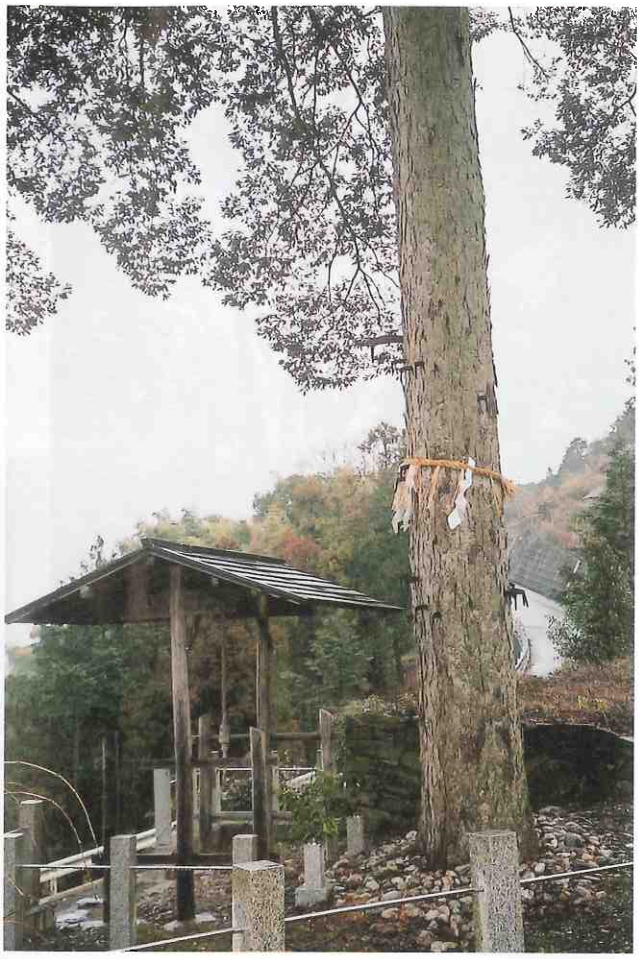
もう一つ、諏訪神社の祭神が、平成七年（一九九五）九月三日に、長野県の本社から御神体をお迎えし、御社を再建し、正遷宮を行っている。その寄附者名を記録した札は、社前の門の屋根裏に打ち付けてある。

鎌八幡宮と諏訪明神宮（兄井）

この点、酒殿神社の氏子総代池田薫氏からの書面によると、明治四十年（一九〇七）兄井の鎌八幡宮・諏訪明神社の両社は、酒殿神社に合祀されて以来荒れていたが、これではいけないと、兄井の区長が諏訪本社に行き、御神体を勧請し社殿も再建した。同時に祭日も合併以前の十月二十一日を再興した。

なお、この時境内にあった櫟の木を選び、区民一同が鎌を打ち込み、「鎌八幡」の信仰も復活した。これらは全て、現在は兄井地区民によって運営されているとある。

新たに祀られた諏訪神社


新たに祀られた鎌八幡社

一方、この両社は、今なお酒殿神社でも祀られ、特に明治二年（一八六九）、高野山から返還された御神体「熊手」も同社に保管されている。こうしてこの両社は、今では兄井地区と酒殿神社の両方で祀られていることが分かった。

②酒殿神社での祭祀

まず前回書いた中に、誤ったことを記しているので、その訂正をしておき度い。兄井地区の鎌八幡宮と諏訪明神社とは、明治四十年、政府の小社合併の政策により、酒殿神社に合併させられた。この時、諏訪明神社の方は、存在させなかったと記した。しかし、その後調査に行ってみると、鎌八幡宮の方は、本殿（丹生大明神・高野王子社）に拝殿から向かって左側に、本殿の二社よりは劣るが、大きな社を以て祀られている。これに対して、諏訪神社の方は、向かって右側に、非常に小さいが、独立して祀られているのが分かった。まずこのことを訂正しておき度い。

鎌八幡社

次に、明治四十年の兄井地区の二社の合祀は、徹底したものであったことが分かった。現在鎌八幡宮内に祀られてある「熊手」は勿論であるが、巡寺八幡宮の様子を描いた大絵馬も共に移動させられていた。この絵馬は、江戸時代の巡寺八幡宮が次の当番に移される時の様子を描いた貴重な絵馬である。江戸の後期に、高野山の行人方の僧が奉納したものであるが、明確な年代は、まだ分かっていない。前にも記したが、私がこの二者に対面出来たのは、昭和五十年頃（一九七四）と考えられるが、この時には、この絵馬は、拝殿の外側に本殿に向けて掛けてあった。勿論、上部の庇（ひさし）の下にあったが、それでも雨が降れば濡（ぬ）れ、また日差しにさらされることもあった。私は、これではいけないと思い、宮司村上菩章氏に忠告し、拝殿内の、現在平成十二年に新調された絵馬が掛かっている処に移動して戴いたのである。それが、今ではさらに拝殿の戸の内側の、座敷内に保管されるようになったことは、保存上条件がよくなったと喜んでいる。

諏訪神社

以下、新しく分かったことを番号をつけて挙げておく。

●●●●

①現在御神木鎌八幡宮前に建てられている石造の鳥居

楠晴帝氏（前総代長）・池田薫氏（現総代）両氏の話によると、兄井地区から合併の時、移されて来たものだとのことである。柱の部分の後方には、「文化六巳年建立」「金光院真尊謹上」とある。金光院は、高野山の一心院谷にあった行人方上通の寺であった。格式のある寺の住職が寄進をしている。

御神木鎌八幡宮前の石の鳥居

鎌八幡宮へ奉納されていた石燈籠

●●●●

②本殿前の石燈籠

本殿前の石燈籠（高さ約二メートル）がある。その中の一基に、「鎌八幡宮」「施主華岡随賢」「永代常夜燈」「天保五年甲午五月」と、四面に銘文が刻まれてある。前記両氏の説明によると、これも兄井から移されて来たものだという。

ただ施主の華岡随賢については、華岡姓である点、注意をしておく必要がある。同姓の華岡青洲（一七六〇～一八三五）は、かつらぎ町の出身で、麻酔剤を造った人として有名であるが、同家は財閥でもあったと思われる。その弟良応（天保六年〈一八三五〉寂）は、出家し、高野山正智院の住職になっている。正智院は、当時壇上の西塔再建に力を注いでいる。同家は、これにも経済的支援をした形跡があり、現在でも、それを記念して、石燈籠が西塔前に建てられている。また、巡寺八幡信仰についても、信仰・寄進者の中に同姓の人の名が他にも出て来るのである。

●●●●

③巡寺八幡絵馬の製作年代

酒殿神社拝殿中央に設けられた本殿参拝の場には、平成十二年九月十八日の日付で「丹生酒殿神社修復御寄進者御芳名」が記されてある。台風により、鎌八幡社が破

平成12年新調の絵馬

損されたのを修復した記念の記録である。その向かって左側に、これを記念して、「巡寺八幡の様子を描いた絵馬」の複製品が掛けてある。絵馬は、酒殿神社が所有している本物の写しである。現在の技術でよく出来ている。

その両縁の向かって右側に「丹生酒殿神社氏子中」、向かって左側には「慶応四辰吉日」とある。疑問に思い、これを楠・池田の両氏に尋ねると、実は、これと同じ絵馬が橋本市隅田の大高能寺（高野山真言宗）にある。これを、酒殿神社側の役人が、絵馬の研究の権威者岩井広実氏に見てもらったところ、これと同年とみてよいだろうということで、その絵馬の年代を使ったということであった。

そこで、同寺の絵馬を見に行くと、問題の絵馬は本堂正面の縁の上部に掛けてあった。ただし絵は落魄がはげしい。その訳を聞くと、寺の人が掃除をした時、絵までも拭いてしまったとのことであった。絵そのものは、酒殿神殿の絵馬の写しであることは明かである。巾約二メートル、縦約一メートルで、少し小型になっている。

向かって、右枠に「慶応四戊辰龍集五月吉日」、左枠に「戀野村花岡清左衛門」と墨書してある。酒殿神社新調の絵馬の年号は、これに依ったということは明かになった。

何故、この絵馬が大高能寺に奉納されたかということについては、隅田八幡神社の信仰を考えなければならない。同社は、橋本市にあるが、九世紀末に石清水八幡宮隅田荘が成立したが、その鎮守社として勧請された由緒ある神社としてこの付近では名が通っている。大高能寺は、その別当寺である。この絵馬が奉納されたのは、同じ八幡信仰という立場にあり、高野山の八幡信仰についての大切な絵馬が酒殿神社にあるところから、それにあやかって、同社にも、近くの戀野村の花岡清左衛門が奉納したものと考えられる。その底辺には、高野山の信仰の影響力の強いことが感ぜられる。

大高能寺の絵馬

慶應四年の銘文

花岡清左衛門の寄進銘文

そして、この年号は、あくまで大高能寺の絵馬に依るものであり、酒殿神社所蔵絵馬の製作年代の参考にしてはならないということである。少なくとも、それに先行するものであることは間違いない。そして、ここにも花岡姓の人が現われている。

④酒殿神社の鳥居

酒殿神社には、三基の石の鳥居がある。その中で本殿から二番目に当たる鳥居、明神鳥居形式の立派なものであるが、前記楠・池田の両氏から、興味ある話を聞いた。この鳥居の柱の下には、兄井の鎌八幡社を合社した時、鎌八幡の神木に立てられていた沢山の鎌を取って来て、この下に埋めたと伝えられているということであった。ここにも、徹底した合祀の跡を見ることが出来る。

第二番目の鳥居

ところで、その柱に刻してある銘文を見ると、「再建」「明治二十五年旧三月　世話人　望月文右衛門　山本熊太郎　酒仲次郎」とある。筆者の調査では「望月姓」の人は、兄井では、重要な家として注目される。本稿（二）の文中、『続風土記』（五・総二九二頁）に、「諏訪氏、代々神職たりしに」、「其の末葉、今、望月嘉八郎と号し、地士にて神職を兼ね、高野山より鎌八幡神酒料として、大豆六斗寄附あり」とある。また現在の酒殿神社の鎌八幡社内に、「諏訪大明神社寄附當村講中」と表記した木札の裏に、「維時明治三庚申歳夏四月　神主望月幸右衛門」と記したのがあることも紹介していた。

これを考えると、兄井の諏訪神宮は、同地の諏訪氏によって祀られていたのである。そして「地士」の制度が出来るのは、江戸時代なので、この時代になると望月氏を称し、神職を兼ね、金剛峯寺から僅かであるが、その手当を戴いていた。さらに、明治時代になっても、神主望月家は続いていたことが分かる。

この点から、この鳥居の銘文をみると、「望月文右衛門」が世話人の筆頭に刻まれているのは、同家の末葉であり、兄井では少なくとも、諏訪・鎌八幡の両社の祭祀には、有力な存在であったと考えられる。そして、この鳥居そのものも、兄井から移されて来たものと考えられる。だから、その下に鎌八幡社の神木に打ち込まれていた鎌なども取って来て、埋められたと考えられる。

よもやま話 Vol.16

雨月物語・仏法僧

雨月物語は上田秋成によって明和五年（一七六八）に執筆され、安永五年（一七七六）に刊行された怪異小説集で全九編からなります。高野山が舞台となっているのは「仏法僧」という話で、時代設定は本文の記述から江戸時代前期、十七世紀後半頃と思われます。

仏法僧とは仏教で重んずる仏・法・僧の三つの宝のことで、ブッポウソウという鳥は鳴き声が「ブッポウ」あるいは「ブッポウソウ」と聞こえるためこの名がつけられました。しかし昭和一〇年（一九三五）にこの声の本当の主はフクロウの仲間であるコノハズクであったことが判明しています。そのためややこしいですがブッポウソウを「姿のブッポウソウ」、コノハズクを「声のブッポウソウ」と呼んだりします。弘法大師空海は「高野山龍光院に於て後夜に仏法僧を聞く」という題の詩を遺しており、「性霊集」に収められています。「仏法僧」本編においてもこの詩が紹介されています。

高野山絵図より　「仏法僧鳥」が二羽描かれています。

以下に「仏法僧」のストーリーを簡単にではありますがご紹介します。夜更け、あるいは早朝や夕暮れの御廟を訪れたことがある方は奥の院の静寂、霊気を含んだ厳かな空間を思い起こしながらお読み下さい。

伊勢の拝志氏の人、隠居して剃髪し、夢然と名を改め旅を老後の楽しみとしていました。京の別荘に滞在したのち夏には末の息子作之治と共に高野詣でに出かけました。山内くまなく拝み廻り、日が暮れてしまいますが宿が見つからず、これもなにかの縁、と弘法大師御廟の前、灯籠堂の縁側に雨具を敷き一晩中念仏しながら夜を明かすことにしました。

杉木立が茂り、水が流れる音がかすかに聞こえるだけの静かな浄域は夜が更けるにつれもの悲しい雰囲気につつまれていきます。夢然が息子に霊場高野山の素晴らしさや三鈷の松の伝説について語っていると、御廟の後ろの林あたりから「ブッパン、ブッパン（仏法、仏法）」と鳴く鳥の声が響きました。夢然は清浄な地にしか棲まないという仏法僧の声に感動し、

鳥の音も秘密の山の茂みかな

と一句詠みました。

その時遠くから先払いの声がいかめしく聞こえてきて、その声はだんだん近づいてきました。

ブッポウソウ（久保田写真館）

※当時は姿も知れず、声もなかなか聞くことができなかった幻の鳥・仏法僧。その声は話の構成上重要な転換ポイントとなり、異界への入口が開かれることになります。

御廟橋を渡る音がして先払いの若侍がやって来たので二人は灯籠堂に隠れ

ますがすぐに見つかってしまい、「何者だ。殿下がおいでになる。早く降りてこい」と言われ、急いで地面にひれ伏しました。ほどなく烏帽子直衣の貴人が灯籠堂に上がり、供の武士四、五人がその左右に座り、さらに数人が遅れて到着し、皆で酒宴を始めました。

貴人は僧衣の紹巴（里村紹巴、連歌師）を呼び、古い和歌、故事についてあれこれ質問し、「風雅集」に弘法大師作として収められる

忘れても汲やしつらん旅人の高野の奥の玉川の水

という歌についても解説させました。

再び「ブッパン、ブッパン」という鳴き声がしたので貴人は紹巴に一句詠ませようとしますが紹巴はこれを辞して夢然を呼び、「先ほどの句を殿下に申し上げよ」と命じました。夢然は今起こっていることが夢とも現実とも分からないまま恐る恐る「殿下とはどなたのことでございましょうか。このような山奥で宴を開くとは、何とも分からないことでございます」と尋ねました。

紹巴が答えます。「殿下と申し上げるのは関白秀次公（豊臣秀次）でいらっしゃる。他の方々は木村常陸介、雀部淡路、白江備後、熊谷大膳、粟野杢、日々野下野、山口少雲、丸毛不心、隆西入道、山本主殿、山田三十郎、不破万作、そして私は紹巴法橋である」。

※豊臣秀次（一五六八～一五九五年）

豊臣秀吉の甥。秀吉に跡継ぎがいなかったことから天正十九年（一五九一）、二十四歳で関白職を譲られますが秀吉に対する謀反の疑いがあり、官位を剥奪されて高野山に追放され、文禄四年（一五九五）七月十五日、金剛峯寺の一室、「柳の間」で切腹したと伝えられています。切腹の理由として他に文禄二年（一五九三）、秀吉の側室である淀君が秀頼を生んだことや粗暴な振る舞いが多いとのことで秀吉の怒りを買った、なども挙げられています。

供の家臣も秀次自刃の前後に殉死した人々です。秀次らの霊が成仏できず、深夜の御廟前にあらわれていた、という訳です。

夢然は大いに驚き、怖ろしさに震えながら紙に先程の句を書き付け、差し出しました。山本主殿がこれを詠み上げると貴人（秀次）が「だれかこの句に末の句（付句）をつけてみよ」と命じました。山田三十郎が進み出て、

芥子たき明すみじか夜の牀

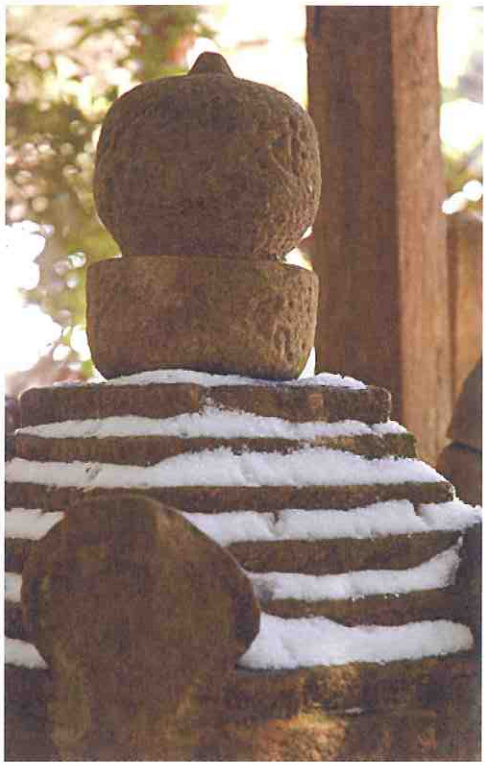
（※「みじか夜」は夏の季語、牀は護摩壇のこと）

と詠むと「悪くない」と言って皆で杯を回しました。

その時雀部淡路が顔色を変え「はや修羅の時刻になったのか、阿修羅どもがお迎えに来たようです」と言うと皆顔を真っ赤にして立ち騒ぎ始めました。秀次が夢然親子も連れて行こうとしましたが、家臣たちに諫められ、そうしているうちに声も姿も消えてしまいました。

夢然親子は気を失い、夜が明けると急いで山を下り、京へ戻りました。ある日夢然が京都瑞泉寺の悪逆塚（秀次とその妻子侍妾三十数名の首を埋めた塚）を思い出し、寺を眺めて「昼間でもゾッとする」と京の人々に語ったのを記したのがこの話である…と物語は締めくくられています。なお、秀次の亡骸は金剛峯寺の北、光台院裏山に埋葬され、小さな宝篋印塔が今もひっそりと建っています。

（F）



秀次の墓石（宝篋印塔）

秀次直筆とされる
辞世の句
「磯かげの松のあらしや
友ちどり
いきてなくねのすみに
しの浦」

アジサイ・紫陽花・その仲間

元高野山高校校長 亀岡 弘昭

高野山でみられるユキノシタ科のアジサイ属の日本産の落葉低木で、植栽されているものでは、アジサイ、ガクアジサイ、アマチャ、自生しているものにはコアジサイ、ツルアジサイ（ゴトウヅル）、ヤマアジサイ、ガクウツギ、ノリウツギなどが知られています。

これらのアジサイ属の学名はギリシア語で「水の器」という意味があり世界的には水辺・やや湿った所・日陰・半日陰を好むものが多いようです。

我が国では、周囲が深緑となった梅雨入り頃から花をつけ始めます。

アジサイ

ガクアジサイ

アジサイは、日本でもごく限られた相模・伊豆・伊豆半島などに自生するガクアジサイを親として、我が国でつくられた園芸種だそうです。

万葉集に「阿治佐為の八重咲く如く…」という、橘諸兄の歌があり、それがアジサイを指すとすれば品種創出が平安以前ということになるという人もありますが、八重咲く如く、ですからヤマアジサイかヤハズアジサイなど自生のものではないかと思っています。

なお、アジサイには、一般に「紫陽花」の字が当てられていますが、咲き始めから花の終わりまでに緑・淡黄白・白・青・藍・紫・赤紫などと花色が変化したり、土壌の違いで青藍色系、赤色系になることなどから「七変花」という用字・呼称も。

両性花は、ほとんどなく、中性花が球形に集まるので「手鞠花」の別称も。和名・アジサイは「集まる真藍」・真藍の花が集まる、ということに由来するといい、花弁状のものはガク片の変形したもの。

高野山の寺院・堂塔の周辺には青藍紫などのものが似合うのでは。

ガクアジサイは粒状の両性花の集まりの縁を中性花が取り囲むような花序の容態から「額紫陽花」、ガクという別名もあり、紫陽花愛好家の間で人気上昇中とのことです。

アマチャはヤマアジサイの変種であるという説が有力で、この若葉を摘みあつめて炒り、丁寧に揉んで乾かしたものを、四月八日の、お釈迦さまの、ご誕生を祝う「花まつり」にそれを煎じて灌仏甘露・甘茶とし

アマチャ

ます。高野山でも、半日陰の所に植えると、よく育ちます。

高野山に自生するコアジサイは、この仲間では珍しく中性花がなくて青紫の粒状の両性花を茎頂に集めて咲かせます。

ツルアジサイ（ゴトウヅルはツルアジサイの変種という説もある）は蔓を、その辺りの樹木などに気根でもって登上して、白い粒状の両性花の縁のところに白い三～四枚のガク片をもった中性花をつけます。ヤマアジサイはサワアジサイの別名もあり、小谷、沢ぞいなどに群生しています。

ガクウツギ、ノリウツギはウツギの名はありますが、ウツギ属のウツギ（卯の花）とは別属、れっきとしたアジサイの仲間。ガクウツギは半日陰の林内や山道端などにみられ、紺色の光沢のある葉からのコンテリギ（紺照り木）の別名もあり白い大きな中性花のガク片も蝶が群がっているようで人の目をひきます。ノリウツギはニベという別名ももち、この木の内皮から和紙を漉くおりに用いられた糊がつくられたのが和名の由来といいます。日当たりのよい原野を好み、高野山では個体数も多く、白い両生花と中性花からなる花の花期の長い、この仲間では幹の周り、樹高が、最も大きく高くなる樹種です。

ここにあげた高野山や霊宝館庭周辺のアジサイの仲間を、ご覧になって梅雨の憂鬱を晴らされ、清々しい気持ちで、宝物拝観をと願っています。

ガクウツギ

ノリウツギ

新規収蔵品のご紹介

久保田写真館より写真機など追加寄贈

昨年の高野山関係の写真寄贈に続き、久保田写真館店主久保田穏松（やすまつ）氏、耕治氏の親子二代にわたって愛用された写真機などが、御遺族より霊宝館に追加寄贈されました。

写真機は大型と中型サイズ合計七台で、すべてが木製となっています。年代的に一番新しいものは、東京の長谷川製作所製で、「HASEMI（ハセミ）」の名で知られたハセミ・ウッド・テクニカルと呼ばれる商品かと思われます。木製折りたたみ式で手作りながら各部の精度は高く、さらに写真機の後部に付けるフィルムホルダーも木製となり、金属やプラスチックにはない木製独特の味わいがあります。寄贈写真機七台中ハセミ製は二台で、それ以外の使い込まれた写真機には、メーカー名も何も記されていません。そのため、いつ頃に製造されたものかよく分かりませんが、ハセミ製の二台は一九七〇年代頃のものではないかと思われます。一枚の絵を丹念に描くような写真を撮る、そんな場合には今もうってつけの写真機といえるのではないでしょうか。

久保田さん親子は、大型の写真機を折りたたみ、ガラス乾板やフィルムを担いで、集合写真や風景写真、寺院撮影にと駆け回っておられたのでしょう。それは、写真機に付いた無数のキズが物語っています。

久保田写真館寄贈の写真機
左の一番大きな写真機は、約193×243㎜のフィルムサイズとなり、その他、中型で約120×170㎜や96×120㎜などの各種サイズの写真機が取りそろえられています。

お詫びと訂正　霊宝館だより第八六号の「久保田写真よりフィルム寄贈」の記事中において脱字がありましたのでお詫びして訂正させて頂きます。

誤　保田穏松氏
正　久保田穏松氏

金属製絵皿盆が寄贈される

縦十九・六cm 横十二・四cmの金属製の小皿盆一対です。寄贈者は高野山在住の亀田金子さん。

絵皿の内面には高野山の大門と金堂がそれぞれ印刷されています。金堂絵皿の方をよくみると、昭和元年（一九二六）焼失以前の古い金堂であることが、当時の写真と比較することでわかります。通常こうした絵皿は記念品的な目的で製作される場合が多く、仮に昭和以前に製作されたものだとすると、大正四年（一九一五）の高野山開創千百年記念大法会あたりが思いあたります。

大門と金堂が印刷される絵皿盆。右が大門で左が金堂

現在の金堂

昭和元年焼失の旧金堂

ごあいさつ

●この度、四月一日から山内の貴重な宝物を保存、展観している霊宝館に勤務することになり、身の引き締まる思いです。微力ではありますが、学びながら責務を果たしていきたいと考えています。皆様のご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

霊宝館の最高の宝は、国宝をはじめとする指定宝物文化財が約二万八千点弱、未指定品においては五万点以上を数える膨大な文化遺産を収蔵しているところであります。

現在は、「童子とほとけ」を企画展示させていただいておりますが、来たる七月十九日から九月十五日まで、第二十九回大宝蔵展「高野山の名宝」にて、国宝・八大童子立像の全てと重文・孔雀明王像が同時公開されますので、是非ご来館いただき、この機会をお見逃しなくご鑑賞いただきますよう、職員一同お待ち申し上げております。

また、世界遺産に登録された高野山の彩り豊かな歴史を広く皆様に知っていただければ幸いに存じます。

（財）高野山文化財保存会
課長 木村 悟

●四月から霊宝館に勤務することになりました。文化財を扱うという、これまでとは違った仕事で貴重な経験をさせていただくことに責任とやりがいを感じております。実際に霊宝館に勤務して、高野山に残る文化財の多さに改めて驚きました。その貴重な文化財を守るとともに、少しでも多くの方に来館していただき満足していただけるようがんばっていきたいと思います。

加古 智津美

拝観時間の変更と利用案内

開館時間（平成18年度から次記のとおり変更されました）

■5月1日～10月31日
8時30分～17時30分

■11月1日～4月30日
8時30分～17時00分

■休館日 年末年始のみ

■拝観料 大人 600円
高・大学生 350円
小・中学生 250円

■専用駐車場あり

紫雲放光

梅雨の季節の花と言えば、アジサイでしょうか。高野山では梅雨の終わりから初夏にかけて咲いているのを見かけます。虫と言えばカタツムリをイメージします。カタツムリは冬眠し1年中いるそうですが、やはり雨の日が似合います。

そう言えば最近、カタツムリを見ていません。たぶん、見ようとしないから見えないのだと思います。探せば、見つかるのではないかと思います。雨の日に散歩するのもいいかもしれませんね。普段みられない物がイキイキと現れているかもしれません。

梅雨の季節は、何かうっとうしい感じや、ちょっと暗い感じがするかもしれませんが、だからこそ、少しでも快適に過ごす工夫ができるといいのではないでしょうか。（S）